

活動報告

ワークショップ

アジア・日本研究センター 国際研究セミナー 研究交流プロジェクト——アジアにおける文化的公共圏の可能性

日程：2006年3月21日(火)～22日(水)

場所：箱根プリンスホテル

1. 土佐昌樹「プロジェクト誕生の経緯と今後の展望」

アジア・日本研究センターでは現在、複数の研究プロジェクトを展開しています。「ポピュラー文化の越境とく想像のアジア」、「アジア・ライフスタイルの成立」、「近代都市文化遺産再生事業」といったものですが、そういった個別のプロジェクトを貫く縦糸としてセンターの活動全体を結びつける共通テーマが、すなわち「文化的公共圏」のコンセプトです。個別のプロジェクトからは少しずつ成果が出始めていますが、この包括的なコンセプトを足がかりにして、特色のある国際的な学術ネットワークを広げていきたいというのが本日の基本的な趣旨です。

こういったコンセプトを持ち出すと、戦前の日本のアジア主義がまず連想されるのはやむを得ないと思います。しかし、「大東亜共栄圏」といったものとここで問題にしている「文化的公共圏」との間には決定的な違いがあります。私たちが広げていきたいのは、どこか特定の国家が中心に位置することのない水平的なネットワークであり、いわば新たなアジア主義を打ち出しながらアカデミックなネットワーキングを図ることで、開かれた議論の場から独特の情報発信をしていけるのではないかと願っています。戦前の「失敗」をしっかりとふまえた上で、新たなアジア主義の社会的意義を実証することが、このプロジェクトの歴史的使命だと考えています。

「公共圏」ないし「公共性」といった概念は、いうまでもなくドイツの哲学者ハーバーマスによって発展させられました。それを短くまとめるのは容易ではありませんし、またハーバーマス自身にとってもこの概念はかなり揺らぎを見せてきましたが、現代アジアをとらえる際にどういった利用価値があるかという点は最低限押さえておく必要があると思います。そもそもハーバーマスにとっての公共圏のイメージは、イギリスのコーヒーハウスあるいはフランスのサロンのような空間において、身分社会のくびきから解放されたブルジョアジーが自由な言論の場を作り出すといった情景でした。歴史的展開の異なるアジア社会にとって、こういう情景がそもそも成立するかどうか疑わしい面もありますが、それを具体的な文化の現場にまで引き戻して検証してみる必要があるし、そしてその価値は大いにあると思います。

ハーバーマスにとっての公共性の概念は、その後、ブルジョア社会において開かれた性格を失っ

ていくという議論につながっていきます。消費社会化が進行していくと、茶の間でテレビを眺めているときのように、人間はだんだん無批判的で受動的な消費者になっていくという議論です。この議論はさらに修正されていき、受動的な消費者に能動性を見出していくことによって公共性の概念が両義的なものになっていきます。この両義性をふまえた上でアジアの文化的現実を見つめ直すことは非常に重要だと思います。今日のアジアは、情報化、グローバル化、消費社会化が急速に進み、その過程で否定的な現象がたくさん見られることも確かです。しかし、その中にある種の開かれた関係性が生まれる契機も無数に見出せます。そうした両義性を踏まえて議論していくことが重要ではないかと思っています。

最後に、このプロジェクトを遂行するにあたって、共通の了解事項を見出していく出発点として4項目の指針を提案したいと思います。第1に、テーマそのものが非常に抽象的なものですから、できるだけ具体的な文化的トピックを通した議論を展開していけたらと思います。第2に、普遍的価値と文化的差異の双方を尊重する姿勢が大事だと思います。第3に、どこか特定の機関や国家が中心になるのではなく、対等な立場同士のネットワーク型交流を目指すということです。最後に、特定の政治状況、ナショナリズムに対して距離を取るという姿勢も大事だと思います。

こうした原則をふまえながら、さまざまな研究交流を重ね、また出版や多言語のホームページといった媒体を通じて情報発信を展開していくことで、このプロジェクトそのものが「文化的公共圏」の好例となることができれば、それに勝るよろこびはありません。

2. 佐藤研一「公共性の概念について」

私はアジアの中でライフスタイルが変化し、あるいは共通化していくという現象にとっても興味を持っています。もともと文化人類学、社会人類学を勉強しておりましたが、どうしても文化の研究をすると言いつつ、実は必ず、タイであったり、あるいは日本のある共同体であったりという具合に、ある社会という単位を暗黙のうちに想定して研究をしています。ところが、アジア全体を社会としてとらえるという視点を持ち込まないことには、アジア全体を視野に文化の研究を行う場合には議論自体が空中分解する、訳が分からなくなるということに気が付きました。そういう研究の中で、この公共圏という概念は、アジア全体をとらえるときの社会という視点を持ち込む際にとっても貢献する概念であると今は考えております。

ハーバーマスにとって公共圏の概念は、ヨーロッパで起こった近代化の巨視的な変化をとらえる壮大な理論体系の中で意味を持つものでした。1960年代に出された『公共性の構造転換——市民社会の一カテゴリーについての探究』では、自立的な市民が担う公共圏がだんだん力を失っていく過程が描かれています。この本は世界的な反響を呼び、多くの大学で教科書にも使われたのですが1990年代になるまで再版がなされませんでした。第2版が出されたときも、本文はそのままかわりに非常に長い序文が付けられました。

その中で、ハーバーマスはどうして今あえて再版するのかということを書いています。当時、1990年ですから東ヨーロッパで起きた東西冷戦の終結を再版の一番大きな理由として挙げているわけです。ハーバーマスはそれまで、この1960年代に書かれた議論が古くなったと思っていたのですが、東ヨーロッパの事例を見ると、この公共圏の意味が現在も生きているものだと改め

で気付かされたというのです。

東ヨーロッパで起きた一連のことは、政府とは別の次元で自由な政治的、批判的なコミュニケーション行為の結果が現れたものです。それを観察することによって、自分が1962年に書いた本は極めて現代的な問題を提示していることに気付き、再版の意義を感じたようです。そして、その時に彼は自分の考え方への大きな修正を書いております。それまでの議論では消費文化が公共圏に対して、あるいはメディアの存在が公共圏に対してマイナスの役割を果たすと彼はずっと言ってきたわけです。しかし、この1990年の時点で東ヨーロッパから彼が学んだことは、ある一つの国で起きた動きがメディアによって報道されることによって別の国にそれが展開し、次々に革命が起きることが生じた。つまり、メディアや消費文化、世界的なシステムが必ずしも公共圏を妨げるものではない、むしろ助ける場合がある。両義的である。この点についてはもっと究明される必要があるという見解を書いています。

私の関心はライフスタイルですが、それは少し拡大解釈すれば文化という言葉に置き換えていいと思います。こういう広域の、あるいはグローバル化する世界の中で文化を研究する際に、それにふさわしい社会のとらえ方をしなければいけない。そのときに公共圏という概念が果たす役割は、ハーバーマスの修正した意味を含めて、大きいだろうと思っています。

3. 羅 紅光「社会が不在する三カ国：中国、韓国、日本」

ここで私の言う「社会」とは、「公共圏」のことだと考えてください。日中韓、この3つの国の間に社会が不在しているのです。それぞれの国の中にはあるのですが、3国をつなぐ間に社会があるかどうか、非常に疑わしい。それぞれ近代化が進んでいるにもかかわらず、社会が存在しない、それが私の印象です。

日本・中国・韓国という3国は、それぞれ違った近代化のプロセスを進めてきました。しかし共通する流れとして、脱亜入欧という強いイデオロギーがありました。たとえば中国では五・四運動とか、魯迅が唱えた反儒教的な動きなどがありました。歴史的には、3国にはそれぞれ儒教的な思想が生きていました。それは当時の公共圏と呼んでいいものでした。しかし、近代革命によってつぶれてしまいます。むしろ日本や韓国では今日でもまだ見えるかもしれないけれども、中国では儒教的なシステムはもうばらばらになってしまいました。

儒教に代わったものは何か。そのひとつが科学主義です。さらにグローバルな市場経済や消費主義が浸透してきて、環境問題とか利益中心の風潮などを生み出しながら、文化的な統合が破壊されたままです。近代科学的思想が伝統とぶつかり合いながら中国に浸透し、儒教社会が破壊されて経済的なパワーと科学主義だけが残りました。科学と経済の背後には、政治やマーケットがあります。ただし社会だけがありません。

こういう問題に対する私なりの取り組みは、草の根運動やNGOと連携し、政府とは関係ない互助制度の中で生きている人たちの在り方に注目することです。たとえば、西安から500キロほど北上した地方のある村は、もう存在しませんが、そこで村人の記憶を集めながら失われた村の絵を再構成するという作業に関わっています。そうした作業を通じて、今は失われて存在しないが、まぎれもなく公共的な空間、すなわち社会があることが実感されます。地域のマーケットには、貨幣に

よる交換ではない豊かな人間的交流も生きていました。こういう風景を前にすると、社会というのが古くからずっとあって、いくら近代革命や科学的思想の影響が強いとしても、それがまだ機能しているということがわかります。

そうした現場の声に謙虚に耳を傾け、対話の基盤を求める方法を私は臨床的な知と呼びたいと思います。中国の事例だけでなく、日中韓の間で、文化的な知、あるいは臨床的な知を出し合いながら対話を続けていければと望みます。今はナショナリズムでは対処できない問題が沢山あります。高齢化、少子化、環境問題など、国境を越えたグローバルな問題に3国はともに直面しています。そうした問題意識を共有して、学者や役人だけでなく、当事者や企業なども入り、対話の輪を広げていく。そういうところに社会を作ることには可能ではないかと考えています。専門家が一般市民を見下すという図式をなくし、現地の人と問題意識を共有しながら対等な協力関係を築く延長に公共圏を作っていきたいというのが私の希望です。

4. 王 甘「新たな公共圏としてのインターネット」

インターネット上にある掲示板(BBS)と呼ばれるものは、サイバースペースで意見や情報の交換に役立つ手段です。そこでは特定のテーマを巡って似たような人々の集まりが形成されています。中国のインターネットでは近年、育児に関するフォーラムが目立っています。専門職やキャリアウーマンであるか主婦であるかを問わず、高学歴、高収入で、インターネットに簡単にアクセスできる環境にある若い母親が集まっています。掲示板を通して、自分自身と子供に役に立つ情報を交換し、育児に関する経験について話し合い、同じような境遇の知人を作り、さらに実際に会っているような活動を組織するのです。

私は2000年12月から2002年3月にかけて、中国における育児用の掲示板の調査を行いました。その調査を通じて、インターネットが実生活の問題について人々の出会いやコミュニケーションの場所を提供できることを発見しました。育児用掲示板を訪れる多くの若い母親にとって、インターネットは単なる情報だけでなく、自分が属することのできる場所まで提供しているのです。サイバースペースにおけるネットワーク化とコミュニティ構築を通じて、若い女性はこの革新的な時代に母親になるという新しいアイデンティティと向き合い、それを自分のものにしようとしているのです。中国の育児用掲示板に注目することで、いくつかの疑問が浮かび上がってきました。育児用掲示板の参加者はインターネット上にどういった空間を作り出そうとしているのか？ インターネットはどのような形で、彼女たちが新しいアイデンティティをつくり、表現するのに役立ったか？ グローバル化の進行は、新世代の中国人女性の母親観と折り合いがつくだろうか？ 仮想空間上の社会関係は、実生活の社会関係をコピーしたものになるだろうか、それともなにか違いがあるだろうか？ ニューヨークにおける育児法が北京に影響し、さらに中国の地方へと影響が広がっていくなかで、自分が世界の中心にいるという感覚にどういう意味があるだろうか？ こういった問題に向き合いながら、インターネットが作り出そうとしている新たな「公共圏」の可能性について考えてみたいと思います。

5. Chulanee Thianthai 「タイの新世代とインターネットに見る公共圏」

インターネットの普及により、若者の生活に与える影響や、移行期にあるアジア社会でとりわけその影響について物議を呼んでいます。新世代にとって公共圏とは、新しいタイプの大衆消費、双方向的で民主的なコミュニケーション、そして自分が望む自己表現を可能にする新たな場所といったものを意味しているのです。こういった変化は、タイの新世代にとって、世界観を変え、あるいは近隣諸国やアジア地域のアイデンティティに対する見方を転換しつつあるだけでなく、タイ国内における旧世代の考え方や行動との違いに注意を引きつけました。したがって、インターネットがそうした変化とどのように結びついているのか、そしてそこから私たちが何を学べるのかを検証することは非常に大切です。もっと大切な問題は、この新しいアジアの文化的公共圏が現代のメディアによってどのように形成されつつあるかを検証することです。

今日、コンピュータやインターネットの使用は都市部において重要な役割を担っています。その中でも、幼少時からコンピュータに慣れ親しんでいるタイの若い世代には、独自のコンピュータ文化があるのではないのだろうかと考え、16歳から19歳までの世代のコンピュータ使用についてさまざまな観点から調べています。

結論として、この世代の若者は、タイ社会で問題視されているような不健全でいかがわしいコンピュータとの付き合い方はしていないことが分かりました。しかしながらコンピュータを、単なる機械としてではなく、人生に影響しうるメディアとして試みているということも明らかになりました。ストレスや進路、人間関係など、以前は家族や学校や地域社会が対応していた問題が、今はコンピュータ上のコミュニティで話し合われています。旧世代からは不審の目で見られがちですが、こうしたコミュニケーションを通じ、国家や民族のアイデンティティに縛られることのない新たな価値観が生まれつつあるのを確かめることができます。

6. 張 竜傑「韓国における文化的公共性の可能性」

最近、韓国の青少年達の中に、以前には強く見られた反日感情が弱くなってきています。それを後押ししているのは、日本の大衆文化ではないかと考えています。アジア的なもの、あるいはアジアの共同体を作り出すために何が必要なのか、ということも韓国ではよく言われるようになりました。メディアでも、アジアの共同体や東北アジア共同体、アジア的な共通の文化といった表現がよく見られます。しかし現状では、韓国でアジア的というと、文化よりイデオロギーや政治面の方が強調されています。

冷戦時代の反共イデオロギーと比べたら、現在の韓国社会は変化が激しく、むしろ混沌の時代と呼べるのではないのでしょうか。ニューレフトあり、ニューライトあります。また今までは国民国家を作り出すために純粋な文化を強調してきたのですが、特に1990年代以降、その文化観も変わってきたと思います。日本の文化を正式に受け入れ始めたのは1998年ですが、その頃から積極的に異文化を取り入れるようになったのではないかという気がします。日本文化による植民地化という杞憂もどこかに消え、若い世代はむしろ自由に楽しんでいるのではないのでしょうか。むしろ最近の韓国では、フュージョン文化が流行しています。自分の文化の純粋さや固有性を守らなければなら

ないという姿勢を捨て、状況や好みに合わせて自分を変えていこうとする主張がメディアでも目立っています。起源をあやふやにした無国籍料理や「混血文化」の再評価が進んでいます。また、人間の移動も増え、韓国も多民族社会の問題に直面しつつあります。

今の韓国でアジア的なものが問題になるとすれば、やはり韓流です。一番驚いているのは、これまで自国の文化が他国で受け入れられるなんて考えもしなかった韓国人自身です。どうしてそれほどまでに広く受け入れられたのか。日本の植民地だった韓国はその文化も知っているし、中華文化、アメリカ文化も経験している。実は韓国文化はモザイクの文化なのです。だから他国の人が見た時に、そこに自文化の要素を見出し親近感を覚えることができる。そこに韓流の秘密があるのだという解釈もあります。アジアの文化を考えるとときに重要なのは、そういった交流の積み重ねです。そうしたごちゃごちゃした積み重ねこそがアジア的な文化であり、そこに固定した共通性を据えてしまったらうまくいかなくなるのではないかと思います。

他方で、何をもってアジア的というのかを考えると、文化だけで成立するかというと、それは難しいのではないかと。日本の大衆文化を受け入れるときも、韓国では政府が主導したから実現したのです。文化が政治やイデオロギーに左右されるのがアジアの現状ではないかという気がします。韓流などの文化交流がうまくいっているように見えても、「靖国問題」ひとつで感情的反発の応酬になります。だからアジア的なものについて議論を深めていく過程で、むしろ文化から政治に働きかけていくという方向も必要になるかもしれません。アジアの公共圏を論ずる上で、そういった政治性についてもう一度考えてみるべきではないかと思います。